

## 未来を創る力「ものづくり」のすすめ

梅原 猛・西澤 潤一  
永 六輔・野田 一夫 共著

本書は、埼玉県行田市にある「ものづくり大学」が開催した、一般の方々も対象にしたいわゆる公開講座の講演内容をまとめたものである。

梅原 猛氏は、同大学の総長を務めておられ、同大学の精神的な中心となっている。

西澤 潤一氏は、半導体の研究者で東北大学や岩手大学の学長を務め、現在は首都大学東京の初代学長を務めている。

永 六輔氏は、放送作家・作詞家として、ラジオほかで八面六臂の活躍である。

野田 一夫氏は、経営学者で、多摩大学や宮城大学の学長を務められた方である。

4氏はそれぞれ専門も違うし語り口も異なっているが、講演の内容から、共通な論点として括ることができる点がいくつかある。

その第1は、「ものづくりの技術と技能によって、日本は非西洋諸国の中でもっとも近代化に成功し、科学技術大国となり経済大国となった。このものづくりの衰退が、日本経済の停滞に繋がった。“ものづくりの復活”なしに日本の繁栄はない。」

その第2は、「日本のものづくり技術技能は伝統があり、高いレベルである。これからのものづくりは、伝統的なものを大切にしながら行わなければならない。」

その第3は、「ものづくりは、単に伝統を守るだけでなく、創造が必要である。」

これらの共通な論点に加え、各氏それぞれの講演内容は、これからの工業教育に大いに参考になるものがあると思う。

永氏は、『伝えたい職人の技と心意気』と題した講演の中で、「何百年とつづく伝統工

芸の技術を守りつづけている人も、最先端の科学技術のそのまた先にいる人も“職人”なのです。宮大工の匠の技も、宇宙飛行士の若田浩一さんが操る先端技術も職人の技そのもの。だからこそ、職人氣質を持った科学技術者・技能者が求められている」と述べている。

西澤氏は、『独創性のある人、出でよ』と題した講演の中で、「資源のない日本は新しい科学技術を進歩させるしかありません。そのためには現場が第1です。現場から離れたら、独創的なものを生み出すことはできません。新しい分野の科学を生み出すには、現場を知り現状と実態を把握したうえで、ものを作ったり、眺めたりということが極めて大切です」と述べている。

野田氏は、『経営というものづくり』と題した講演のなかで、「ものをつくるためには、ものづくりの技能や技術だけでなく、会社を経営するための知識や経験、あるいは技能や技術が必要とされます。ものづくり日本の経済活動が、さらに充実発展していくためには、高い“ものづくりマネジメント”が求められています」と述べている。

梅原氏は、『ものづくりは日本の誇り』と題した講演の中で、「古来、日本のものづくりは技術であるとともに芸術でもあった。縄文時代の土器や漆塗りの木製品などから、優れた技術力が証明されている。このようなものづくりを得意としている日本人の特性が、百数十年余で今日の豊かな日本をつくり出したが、豊かさが“ものづくりの衰退”を招いている。いまこそ、“ものづくりの技能と道徳”を、復活させなければならない」と述べている。

ものづくり日本を支える工業教育に関わる方々に、是非とも一読をおすすめしたい。

(講談社, 225頁, 1,575円) (梅田政勝)